



Title	Vol.7 No.4
Author(s)	核兵器廃絶研究センター(RECNA)
Citation	RECNAニューズレター, 7(4), pp.1-4; 2019
Issue Date	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/38832
Right	(c) 長崎大学核兵器廃絶研究センター

This document is downloaded at: 2019-05-23T19:36:26Z

国立ソウル大学校統一平和研究院(IPUS)との協力覚書更新： 韓国研究機関との連携を強化

鈴木 達治郎

2019年1月9日(水)、国立ソウル大学校統一平和研究院(Institute for Peace and Unification Studies)とRECNAの協力覚書更新のための調印式と記者会見がRECNAにて開催された。IPUSからは、イム・キョンフン院長をはじめ、総勢7名のメンバーがRECNAを訪れた。7名の専門は、それぞれ政治、経済、農業経済、平和研究、憲法と多岐にわたっており、研究院の持つ多様性を反映したメンバーであった。

IPUSとRECNAの協力覚書は、「長崎大学と国立ソウル大学校との間の学術交流協定書」(2007年7月16日締結、2012年7月16日に更新)に基づくもので、2014年2月1日に両研究機関の間で締結されたものである。

両研究機関の協力のきっかけは、2013年6月、韓国の韓信大学にてRECNAが主催した「北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ 第2回国際ワークショップ」にIPUSのスタッフが参加したことであった。これを機に2014年1月に、広瀬RECNA副センター長と全教授がIPUSを訪問し、協力関係の構築について意見交換を行った結果、2月に覚書を締結することとなった。それに基づき、2014年9月、東京で開催されたRECNA主催の「北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ 第3回国際ワークショップ」にIPUSスタッフが参加、2016年4月にはナガサキ・ユース代表団がIPUSを訪問して、意見交換を行うなどの交流を実施してきた。

しかし、その後は研究機関同士の交流がしばらく途絶えており、2018年に朝鮮半島情勢が急変したことを受け、再び交流を活発化する方向で検討を始めることとなった。そして、2018年11月、RECNAスタッフがソウル大学校を訪れ、IPUSと意見交換を行った結果、覚書を更新することで合意に達したのである。

IPUSは国立ソウル大学内に設置された独立の研究機関であり、RECNAと同様、特定の学部には属しているわけではない。研究は、統一研究センター(Center for Unification Studies)と平和と人文研究センター(Peace and Humanities Research Center)が存在しており、統一問題や北朝鮮の政治・経済情勢の分析のみならず、平和研究や信頼醸成など多岐にわたっている。ただ、核問題に関しては専門家が少なく、



調印式の様子、左がイム院長、右が鈴木センター長 2019年1月9日
(場所:RECNA 撮影:RECNA)



訪問されたIPUS研究者らとRECNA教員 2019年1月9日
(場所:RECNA 撮影:RECNA)

「RECNAとの協力関係は、IPUSにとっても『非核化問題』を研究する意味で非常に有意義である」、とイム院長は記者会見で述べられた。逆にRECNAにとっては、朝鮮半島そのものの専門性が不足しており、北東アジアの非核化を研究する意味でも、IPUSの多様な専門性は大変魅力的である。

調印式と記者会見の後、北朝鮮情勢に詳しいキム・スチュル教授より記者向けの解説をしていただき、最新の動向と今後の課題について、貴重な情報提供をしていただいた。特

に、「完全な非核化を求めると、部分的にでも検証可能な非核化を進めることが重要」、「核問題のみならず重要なのは朝鮮半島の平和を実現することだ」、「日韓は共通の目的を共有していることをまず認識すべきだ」、といった重要な見解を紹介していただいた。また、会合後、河野学長のもとへも表敬訪問していただき、意見交換を行った。

最後に、本ニューズレターで紹介されているように、RECNAはIPUSのほか、世宗研究所や韓信大学との協力関係を再構

築し、米国のノーチラス研究所やカーネギー平和財団との協力関係も強化して、日米韓の専門家ネットワークを構築し、北東アジアの非核化にむけて政策提言能力を強化していく所存である。

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

研究協力 (世宗研究所)

韓国の世宗研究所と新たな協力へ

吉田 文彦

長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)の教員を中心とする研究チームが2018年11月29日、韓国を代表する民間研究機関である世宗研究所を訪問した。情勢が大きく動き始めた北朝鮮の非核化をめぐる、研究交流や政策提言などで協力関係を深めていくことが主たる目的で、白鶴淳(ペク・ハクスン)所長、李勉雨(イ・ミョンウ)副所長らの歓待を受けた。

世宗研究所の設立は1983年。韓国の安全保障と南北統一に関連する研究に加え、韓国の対外関係に必要な研究と教育・研修を行ってきた。ソウル郊外にある厳かな雰囲気と同研究所の建物に着くと、日本語が堪能な李副所長が出迎えてくれ、白所長の部屋に案内された。

RECNAが北東アジア非核化のための国際ネットワークづくりや政策提言を重ねてきた経緯等を説明すると、白所長は「2018年に南北首脳会談、米朝首脳会談が開催されたことで、朝鮮半島の状況は大きく変わるかも知れない情勢になってきた」RECNAが重視している北東アジアの非核化についても、今後、研究に力を入れていく必要があると考えている」と応

じてくれた。

その後、李副所長から、世宗研究所の組織概要や研究、教育・研修プログラムについて説明してもらった。研究所内には日本研究センターもあり、専門性の高い分析が続けられていることが印象的だった。最後に、白所長、李副所長のほか、安全保障や北朝鮮問題等の専門家も加わって、北東アジアの非核化に関する意見交換を行った。

訪問時の白所長との対話や、帰国後のメールによるやりとりの中で、2019年度の前半に、RECNAと世宗研究所の共催で国際的な専門家会合をソウルで開催し、議論の成果を発信していくことで基本合意した。RECNAは国立ソウル大学校等との交流も継続していく方針だが、国際社会への発信機能の強化という面では、世宗研究所との新たなパートナーシップも大切な一歩である。まずは今年の専門家会合をより実りあるものにするべく、協力関係を強めていきたい。

(よしだ ふみひこ、RECNA副センター長)

核兵器廃絶 地球市民集会ナガサキ

地球市民集会分科会3:

Youth Union for Peace 共同代表

「次世代とつくる核なき世界」を終えて

光岡 華子

「平和活動にもっとワクワク感を」

第6回核兵器廃絶地球市民集会ナガサキの分科会3の企画運営を担当した、大学生などの若者約10名で構成されるYouth Union for Peaceのメンバーは、当日へ向けて準備を進める中で、この想いを強くしてきました。

私たちは、核兵器の問題は被爆地の問題ではなく、一人一人の問題であるという考えを持ち、日本全国の若者に核兵器

の問題に対する意識調査を行いました。1,187名から回答を得て見えてきたのは、約8割の若者が核兵器の問題に関心を示している反面、実際に活動に関わった経験のある若者は2割に留まり、「核兵器廃絶」、「平和活動」という言葉に対してネガティブなイメージを持っているということでした。その理由として、核兵器に関する問題は自分に関係ない、そもそも政治に関わることへの拒否感がある、活動に参加すると周囲から



Youth Union for Peace集合写真 2018年11月17日
 (場所:長崎市平和会館ホール 撮影:核廃絶地球市民長崎集会実行委員会)

良くない印象を持たれる、といった若者の率直な声が挙がりました。

これらの結果から、平和活動の堅苦しさや敷居の高さを払拭し、平和活動はどんな人でも関わっていいものであり、未来を変えるというワクワク感を持って取り組めるものにしていくべきではないかと考えました。もちろん、活動への想いや真面目さは必要ですが、このまま少数の人だけが関わるという構図が続くと、一人一人が考えるべき課題であるという意識が生まれにくく、特別な人だけが関わることになってしまいます。だからこそ、いろいろな人と対話ができる環境をまずは作っていくことが大切なので、当日は調査結果を示した後、ディスカッションの時間を設けました。



分科会3 パネルディスカッション 2018年11月17日
 (場所:長崎市平和会館ホール 撮影:Youth Union for Peace)

会場で初めて会った人同士が一つのテーブルで意見を交わし、平和への想いや、課題をいかに克服するかの議論を行い、対話の重要性や若い世代への可能性を見出すことができたように思います。

大きな影響力のある活動だけが平和のために必要なのではなく、一人一人の行動や姿勢そのものも平和に結びつくという認識で、これから多くの若者を巻き込んでいきたいと思っています。

(みつおか はなこ、Youth Union for Peace共同代表)

RECNAの活動

2019年1月1日～2019年3月31日

- | | |
|---|--|
| <p>1月9日(水) ■韓国国立ソウル大学校・統一平和研究院との間の学術研究協力に関する覚書の更新にかかる調印式
 場所:長崎大学RECNA会議室</p> <p>1月11日(金) ■J-PAND (Journal for Peace and Disarmament) 第1巻2号発行</p> <p>1月22日(火) ■英国シンクタンクとの軍縮ラウンドテーブル「核保有国の責任等について考える」参加(鈴木センター長、吉田副センター長)
 場所:東京・日本国際問題研究所</p> <p>1月26日(土) ■平成30年度核兵器廃絶市民講座 第6回「核廃絶寸前 レイキャビク首脳会談の教訓」
 講師:吉田副センター長</p> <p>2月4日(月) ■INF全廃条約消滅に関するRECNA見解発表</p> | <p>2月9日(土) ■非核の政府を求める兵庫の会総会記念講演会 講演(神戸)(鈴木センター長)</p> <p>2月18日(月) ■第4回RECNA「長崎被爆・戦後史研究会」
 場所:長崎大学RECNA会議室
 講師:山本 明宏氏(神戸市外国語大学准教授)
 テーマ:「ポピュラー文化に描かれた長崎原爆の傷痕 —1960代の「任侠映画」を中心に—」</p> <p>2月23日(土) ■特別市民セミナー「急転する朝鮮半島情勢—北東アジアと日本の選択—」
 場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
 講師:陳昌洙(韓国世宗研究所日本研究センター長)</p> <p>3月7日(木) ■第10回RECNA運営委員会
 場所:長崎大学RECNA会議室</p> |
|---|--|

(次ページへつづく)

RECNAの活動

2019年1月1日～2019年3月31日

3月11日(月) ■国際会議“2019 Carnegie International Nuclear Policy Conference”参加(米国・ワシントン)
～3月12日(火) (鈴木センター長、吉田副センター長)

3月23日(土) ■Round Table on Legal Challenges for Nuclear Deterrence参加(英国・ロンドン)
～3月27日(水) (広瀬副センター長)

お知らせ

平成31年度核兵器廃絶市民講座「核兵器のない世界をめざして」

第1回「最前線の核軍縮議論から ～NPT準備委員会から垣間見えるもの～」

講師：広瀬訓(RECNA副センター長)、中村桂子(RECNA准教授)

パネリスト：ナガサキ・ユース代表団第7期生 2名

日時：2019年5月25日(土) 13:30～15:30

場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ

第2回「米国の核使用は日本を守るか」

講師：吉田文彦(RECNA副センター長)

日時：2019年6月29日(土) 13:30～15:30

場所：アルカスSASEBO

※受講料は無料、参加申し込み不要

※15:30～16:30「RECNAと語ろう」

主催：核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

編集後記

最近の朝鮮半島情勢の狭間でRECNAの役割は何か？

全 炳徳

RECNAが主催する「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」はこの地域での核廃絶を懇願する重要な枠組みの一つである。近年、北朝鮮の核実験とその後の動きが北東アジア情勢に多大な影響を与えている中、最後の戦争被爆地・長崎の願いを背負うPSNAの活動と役割は大変大きいと言える。今後、このパネルに北朝鮮を含む朝鮮半島の情勢に詳しい人の参加が求められている。

今回、訪問・協議が叶えられた国立ソウル大学校・統一平和研究院(IPUS)、韓信大学校・平和と公共性センター(CPPI)、国立統一研究院(KINU)、北韓情報センター(NKDB)、国立外交院(KNDA)、世宗研究所(SI)などは北東アジアの平和と安全保障を考える上で重要な韓国内のパートナー機関である。今回の訪問から感じたことを以下に纏める。

第一に、RECNAへの期待は大きい。韓国内には平和と安全保障を考える機関が多いが、一般的に朝鮮半島の統一に焦点が合わされている場合が多い。特に、今の政府はその色がより濃くなっているような気がする。しかし、今回の訪問を通して議論を交わした大学や国立機関の研究者レベルからしてみれば、RECNAが提示する「北東アジア非核兵器地帯」への理解も、その必要性についても認める発言が多かった。韓国内においてRECNAの活動には一定の効果があり期待も大きいと言える。

第二に、理想と現実の狭間を通り抜ける秘策が必要であろう。国立外交院での会合で会ったある出席者からの発言が印象深い。「近年の国際会議等で議論となる、北朝鮮の非核化への可能性について、“信頼できるのか”、“真実性はあるのか”との質問が多い。しかし、その答えは“分からない”としか言えない。非核化は理想であり、信頼や真実性の疑念は現実だが、非核化が北朝鮮にとってメリットがあるのならば北朝鮮の非核化は進む可能性が高いからだ。」

現実には利益に向くものだ。RECNAが理想を提示しつつも、利益を生む秘策をパネルの議題に提示できることを願う。

(ちよん びよんどく、RECNA兼務教員(教授)、教育学部)

RECNA ニュースレター
長崎大学核兵器廃絶研究センター

第7巻4号 2019年3月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 インテックス

©2019 長崎大学核兵器廃絶研究センター